西脇常記著 介

唐代の思想と文化

吉川忠夫

部構成のもとに本書に盛られているのである。

このような言葉に、本書が目指さんとするところは明らかに示され うに受けとられているが、その間の動きは必ずしも明らかでない。 **靱を通って宋學へ續く道は、すでに中國思想史上の自明の流れのよ** て茫洋としたものに感じられるかも知れないが、本書を一讀しおえ 文學研究はそれなりに盛んであったであろう。佛教についても、個 なかったとさえ述懷されている。恐らくその頃においても、唐代の ている。著者が中國の學問に志した學生の頃、中國思想通史で取り 結果からの線引きに過ぎない面も多分に含んでいる」(一二五頁)。 のであったのかどうか」(八八頁)、「初唐の經學から、 の谷閒とされてきた唐代思想が、果たして言われるごとき貧困なも いるからだ。「從來、漢以來の訓詁注釋學と總合的體系的な宋學と 底するものをトータルにとらえようとする文章がそこには盛られて よって唐代の「思想と文化」の諸相について語りつつ、それらに通 わしいものであることを納得するに違いない。新鮮な視點と手法に た者は誰しも、なるほどこのタイトルがいかにも内容に即したふさ 上げられる唐代の思想家といえば、たかだか韓愈と李翶にしか過ぎ 「唐代の思想と文化」という本書のタイトルは、一見そっけなく 韓愈、李

通』、第二部「中唐の思想」、第三部「習俗」、第四部「遺言」の四り、かくして得られた成果のかずかずが、第一部「劉知幾と『史り、かくして得られた成果のかずかずが、第一部「劉知幾と『史好の中に收める、そのような研究は望まれるべくもなかった。著者野の中に收める、そのような研究は望まれるべくもなかった。著者がそれらを綜合して儒佛道三数を通貫し、さらにはまた文學をも視々の事象に關する研究の蓄積はかなりのものであったであろう。だ

だが、西洋の基準によって中國を一刀兩斷に切って捨てるわけでは あり、西洋の事象を參照する視點は本書にも絕えず底流しているの 點である。著者は西洋の學問を修めたらえで中國學に進まれたので Autobiographie が自己の個性を語るものであるのと大きく異なる した解説的性格の強いものであること。これらの特長は、 記述態度という點で本質的に變わらないこと。三、常に著作に附隨 に基づいて他人によって書かれるところのその人の傳記も、客觀的 く、氏族や家族の記述を常にともなうこと。二、自敍も、またそれ のように整理されている。一、自己を露わに語るためのものではな の Autobiographie との對比のもとに、中國の自敍の特長がつぎ だが、まず『史記』の「太史公自序」その他を検討したうえ、 意識」においては、もっぱら『史通』の自敍篇が取り上げられるの にもふさわしいこととすべきであろう。その第一章「劉知幾の歷史 であって、第一部において『史通』があつかわれているのは、い 會、 一九八九年)、 外篇の譯注もすでに準備中であると仄聞するの そしてその後、『史通』内篇の譯注を世に問われ(東海大學出版 著者の處女論文は、『史通』に關するものであったと記憶する。 西洋の 西洋

なく、この場合にも、これらの三點に西洋とは異なる中國の自敍の

れ、その上に高次の隨時の思想が成立している」。

く打ち出されていることが指摘される。 常え、『史通』の構成、內容について語るという著者の主體性が強相を異にして、『史通』の自敍篇では氏族、家族についての記述が特長を見出しているのだ。ところが中國の自敍一般とはいささか様

解明する、つまりある道德的判斷をその上に書き加えるという意識 と「隨時」とが對立する概念としてとらえられている場合と、「隨 ては、「師古」すなわち古を祖述し、古にまねぶということ、それ 知幾の姿を明らかにしようとする。著者によれば、『史通』におい の概念に注目し、それを分析することによって、史評者としての劉 價するに當ってしばしば用いている「師古」と「隨時」という二つ であった」、このように第一章には述べられているのだが、第二章 の下に立ちながら、さらにもう一度、事實を事實とすることを問 考えられる狀態を隨時とする場合の二つであった。第一段階の隨時 びったりと宜を得た狀態、つまり理と事の世界がうまく調和したと する從時の立場を是とする場合、もう一つは、その上でその事象が なわち、「一つは、歴史家として歴史の流れの中に事象を見ようと のものとして考えられている場合との兩様が認められるという。す 時」が「師古」を越えた、あるいは「師古」を包みこんだ高い次元 世界と隨時の世界、 界へと傾いて行ってしまう。……古と今、雅と俗、質と文、師古の に走れば、餘りにも雅の世界から離れ、俗の世界へ、枝葉末節の世 い、それに反省を加えたと言える。それが彼の批判精神、懷疑精神 劉知幾は歴史家として、事實を事實として書き、事實の眞實を ――史評者の立場――」では、『史通』が過去の史書を評 理と事の世界は、常にそのバランスが考えら

そうであるにもかかわらず、『史通』に内包されているこのようた高次の「隨時」の概念に注意がはらわれることなく、もっぱら疑な高次の「隨時」の概念に注意がはらわれることなく、もっぱら疑な高次の「隨時」の概念に注意がはらわれることなく、もっぱら疑な高次の「隨時」の概念に注意がはらわれることなく、もっぱら疑察を打ちこむべく用意されているのが第三章「宋代における『史楔を打ちこむべく用意されているのが第三章「宋代における『史楔を打ちこむべく用意されているのが第三章「宋代における『史楔を打ちこむべく用意されているのが第三章「宋代における『史東家たる者には才學識が必須不可缺であるとする「史才三長説」、史家たる者には才學識が必須不可缺であるとする「東大局的には『史通』が批判の對象とされた流れの中においても、歴大局的には『史通』が批判の對象とされた流れの中においても、歴史家たる者には才學識が必須不可能であるとする「五不可論」、それ中の変知幾の重要な主張が宋人にとっても大いに意識せざるを得ないものであるにもかかわらず、『史通』に内包されているこのようにあるとする「五不可論」、それ中の変知後の重要な主張が宋人にとっても大いに意識せざるを得ないものであるにもかかわらず、『史通』に内包されているこのようにあるとする「東京」に対している。

97 —

た。凡人が聖人になり得るということは、社會的には中小層の出身でに越えていた。學問は凡人から聖人への最も有力な原動力となって、吳筠の作品の中でも、受ける氣の違いによって人関を警哲、中人、頑兇の三品に分け、中人の教育の可能性を見出す「玄綱論」、中人、頑兇の三品に分け、中人の教育の可能性を見出す「玄綱論」、中人、頑兇の三品に分け、中人の教育の可能性を見出す「玄綱論」、中人、頑兇の三品に分け、中人の教育の可能性を見出す「玄綱論」、中人、頑兇の三品に分け、中人の教育の可能性を見出す「玄綱論」、中人、頑兇の三品に分け、中人の教育の可能性を見出す「玄綱論」、中人、頑兇の声は、漢書の関連のもとに注目されているのは、權德輿の周邊の人物としてまず最初に取り上げられているのは、權德輿の周邊の人物としてまず最初に取り上げられているのは、權德輿とその周邊」。

體觀を說いて現實に生活する人閒そのものを問題にした」云々と評を今一度自己の學問として考察し、さらには新しい世界觀の樹立を求めようと考えたのが權德與周邊の中唐士大夫達だったのであるが、いわゆる禪師たちだけではなく、權德興をその一人として多くの士大夫ゆる禪師たちだけではなく、權德興をその一人として多くの士大夫ゆる禪師たちだけではなく、權德興をその一人として多くの士大夫のる禪師たちだけではなく、權德興をその一人として多くの士大夫のる禪師に話躍出來ることを意味し、個人的には人格の陶冶を意でも政治的に活躍出來ることを意味し、個人的には人格の陶冶を意

している。

第二章は『茶經』の著者として知られる陸羽の自傳をあつから第二章は『茶經』の著者として知られる陸羽の自傳をあつから第二章は『茶經』の著者として知られる陸羽の自傳をあつから第二章は『茶經』の著者として知られる「中唐の思想」を論ずるに當って、著者が權德興との人はあれないが、彼はいわば士大夫のネット・ワークの要に位置していたのであって、彼の文集には、中唐という時代が目配りよく映し出されていると考えられるからである。小さな疑問を呈するならば、「百巖禪師碑銘」の引用の中の「その外界對象を切り捨てて心を會得するものでもないし、またけがれを去り清淨を取り出し神妙を會得するものでもないし、またけがれを去り清淨を取り出し神妙を會得するものでもないし、またけがれを去り清淨を取り出し神妙を自得するものでもないし、またけがれを去り清淨を取り出し神妙を自得するものではあるまいか。原文は注に示されているので象に位置したりれる「中唐の思想」を論ずるに當って、著者が權德興に注目したられる「中唐の思想」を論すると名に本書の最大の眼目であると祭せのにはあるまいか。原文は注に示されているので参照されたい。第二章は『茶經』の著者として知られる陸羽の自傳をあつから第二章は『本記』を記述といる。

「『陸文學自傳』考」。中國における自敍の特長はすでに第一部第一

で頭と爲し、懷素を狂と爲す。狂を以て顚に繼ぐ、孰か不可と爲さて頭と爲し、懷素を狂と爲す。狂を以て真に繼ず、孰か不可と爲さ、「五柳先生傳」から白居易の「醉吟先生傳」まで たどったうえ、「五柳先生傳」から白居易の「醉吟先生傳」まで たどったうえ、「陸文學自傳」をひとまずその流れのうえに位置づける。そして著者によれば、「陸文學自傳」に表現されているのは、隱逸、狂人、自由人の姿であり、はたまた遊戲の精神が託されているのであっ自由人の姿であり、はたまた遊戲の精神が託されている。「一人、曾聞人、自由人、遊戲の精神。それらを綜合するならば、風狂とか風顔人、自由人、遊戲の精神。それらを綜合するならば、風狂とか風顔人、自由人、遊戲の精神。それらを綜合するならば、風狂とか風顔人、自由人、遊戲の精神。それらを終合するならば、風狂とか風顔人、自由人、遊戲の精神が託されているが、「大史公自序」を典型とするところで顧と爲し、懷素を狂と爲す。狂を以て顚に繼ぐ、孰か不可と爲さて頭と爲し、懷素を狂と爲す。狂を以て顚に繼ぐ、孰か不可と爲さ

考察を加えたうえでこう力説している。「今、先に考察した人々を 想と學問の策源地にほかならなかった。著者は三人の思想と學問に そこは中唐の時代に、時代を劃する新たな意義を擔って登場した思 すなわち江南は、劉禹錫が生まれ育った所であっただけではない。 の梁肅の三人であり、「江左に集り士大夫」と呼ばれている。江左 錫の才能を早くから買っていた杜佑と權德與、それに權德與の友人 ような人々なのであった。つづいて取り上げられているのは、 じ、詩が詠めるだけではなく、儒教的教養もなみなみならぬ、その よれば、詩僧は南宗禪と何らかの關わりがあり、また單に佛法に通 が生を享けた大暦年閒に成立した一つの槪念なのであって、著者に た僧侶といった一般名詞であるのでは決してなく、まさしく劉禹錫 に教えを受けた靈澈を始めとする詩僧たち。詩僧とは、詩作に優れ る手法を用いる。まず取り上げられているのは、劉禹錫が少年時代 彩る人物について語り、彼を取り卷く思想狀況を明らかにせんとす おいても、第一章「權德興とその周邊」と同樣に、劉禹錫の周邊を の「天論」を取り上げてしばしば論じられてきた。著者はこの章に ある劉禹錫。その思想家としての側面は、これまでにももっぱら彼 見ながら結局失敗に終わった王叔文一派のいわゆる八司馬の一人で よって新しい道を見つけようとする、主體的な人間の自覺を持って でに彼らの生きる指針とはなり得なかった。章句學を廢することに る道に取り戾そうとする運動であった。從來の經書學=章句學はす 排した人々であったことに思い當たる。「不學章句學」が持つ雰圍 再び振り返って見れば、一樣に「不學章句學」を揚げ、章句の學を 第三章「劉禹錫の思想」。順宗のもとで政治改革を行なおうと目論 精神は一體いかなるものか。それは經書をもう一度自己の生き 劉禹

> だただこれらの對象に向から自己の確立、自己の意識が重要であ で等價値である。あらゆるものが彼の學問の對象となり得る。 とに行きつく。道の追求の前には、儒教も佛教も道教もすべて一樣 目論んでいた。それは結局、經書の枠を越えて、道の意味を問うこ 錫その人について結論とするところもつぎのごとくである。 の大義大略の中に學問の道を求めた」と述べられており、また劉禹 秋學の陸質を師とした友人の呂溫について語るくだりにおいても! められるからにほかならない。啖助――趙匡――陸質と次第する春 史上に中唐時代を正しく位置づけんことを目指す第二部の總括と認 敢えて長文にわたる引用を行なったのは、この文章こそ、中國思想 のあらゆる可能性を信じ、自己を切り開いて行く態度であった」。 て、教義そのものよりは實践に重きを置き、現實に生きて行爲する 對しても同様であった。彼らが接觸した南宗禪、 華嚴、 天台は全 全體へと注がれる。かかる態度は經學に對してのみならず、佛敎に 釋學から解放され、彼らの目は經典と經典との關係、さらには經典 自由に交わり得る空閒が開かれる。教義と化した儒教經典の注疏解 初めてかく叫び得るのではないか。ここに詩僧とも僧とも道士とも 人閒を中心に据えている。それは主體的人閒の發見であった。人閒 「ここに擧げた人々は從來の訓詁學的解釋學を捨てて、初めて春秋 經の訓詁的解釋を排して、經書全體の總合的な意味を問うことを

い學問の流れの中に生きていたことが分かる」と述べられている點及していることを取り上げ、「これら二點からも、杜佑が所謂新し之學」であったこと、そのことにあわせて彼が佛教の因果應報に言うこぶる力のこもった一章とすべきであるが、杜佑が「不好章句

るし。

にいささかの疑問を呈したい。と言うのも、佛教の因果應報說は

南

まいか。ふまえるのはもとより『論語』衝靈公の「仁に當たりては寄せた佛教とはどういうものか。それは時あたかも生まれ出で、江寄せた佛教とはどういうものか。それは時あたかも生まれ出で、江寄せた佛教とはどういうものか。それは時あたかも生まれ出で、江寄せた佛教とはどういうものか。それは時あたかも生まれ出で、江寄せた佛教とはどういうものか。それは時あたかも生まれ出で、江寄せた佛教とはどういうものか。それは時あたかも生まれ出で、江寄せた佛教とはどういうものか。それは時あたかも生まれ出で、江寄せた佛教とはどういうものか。それは時あたかも生まれ出で、江寄せた佛教とはどういうものか。それは時あたかも生まれ出で、江寄せた佛教とはどういうものからであり、「彼らが關心を書くさざれば、敢えて仁に當たるを護らんや」と訓むべきではある。

師にも譲らず」。

史の集積とも言いうるのである」、このような問題關心に基づいて東の集積とも言いうるのである」、このような問題關心に基づいて東のこと、寺院における權葬のこと、改葬のこと、風水思想のとと、中國の習俗は佛教等々に説き及ぶ。それは、「中國に佛教が將來されて以來、佛教の等々に説き及ぶ。それは、「中國に佛教が將來されて以來、佛教の等々に説き及ぶ。それは、「中國に佛教が將來されて以來、佛教のの儀禮に變容を迫った。そうして初めて中國の土壌に根ざした中國の儀禮に變容を迫った。そうして初めて中國の土壌に根ざした中國の儀禮に變容を迫った。そうして初めて中國の土壌に根ざした中國の儀禮に變容を迫った。そうして初めて中國の土壌に根ざした中國の儀禮に變容を迫った。そうして初めて中國の土壌に根ざした中國の機能に變容を迫った。そうして初めて中國の土壌に根ざした中國の人機能に表示した。そうして初めて中國の土壌にし、その第一章第三部は、第一部、第二部とはすこぶる趣を異にし、その第一章第三部は、第一部、第二部とはすこぶる趣を異にし、その第一章第一次に表示といる。

男性」とは異なる女性の立場に求められているのも興味深い。「儒教世界というタテマエの世界で最後まで生きざるを得なかったですらなかなか受け入れがたいものであったことを一目瞭然に教えですらなかなか受け入れがたいものであったことを一目瞭然に教えですらなかなか受け入れがたいものであったことを一目瞭然に教えでくれる。あるいはまた、墓誌において明確に佛教信仰を傳える記いるのである。たとえばそこに示されている『梁高僧傳』、『續高僧いるのである。たとえばそこに示されている『梁高僧傳』、『續高僧

これをこう訓みたい。「氣絕ゆるの後、若し直に之を草野に棄て、

二部と重なるのだ。ちなみにこの章に「『禪林僧寶傳』の理解のた

はないか。知覺が絕えることがあろうか」と譯されている(二九二

本章では「(たとえ死んでも) 魂はどこへでも飛んで行くと言うで

では「魂之かざる無し)庸詎ぞ知らん」と訓讀され(二二二頁)、たらそれっきりのことだ」と解釋され(一八二頁)、第三部第一章

もし私の解釋が正しいとするならば、これは林莽の例とはなり得な故、薄板の棺桶に屍を納めて土葬することを命じたのではないか。れがあまりにも奇矯に過ぎることをはばかったのではないか。それは謝貞のかねてからの願いではあったけれども、しかし彼とて、そ獨異と爲らんことを恐るる耳」云々。つまり、尸陀林法に從うこと僧家の尸陀林法に依らんこと、是れ吾の願り所なるも、正に過ぎて

者側の悟りの契機として、自らの精神の血肉として行こうとする立 王たる天子の信仰と事業を通してその加護を受け取るという受動的 ことを意味している」。また結論としてあらためてつぎのように述 や護教的な教義佛教から、個人の自覺的な佛教へと移りつつあった たこれら神異感通が個人の覺悟の證しと見られたことは、佛敎が今 示したうえで著者はつぎのように述べている。「舍利の異象を含め している。すなわち、高僧臨終の際の舎利その他の異象の記事を例 の、そこには何よりもつぎのごとき重要な意味の存することを見出 かに僧侶の閒に次第に火葬が普及したことと無關係ではないもの めて高僧舎利信仰の記事が現れることを指摘したうえ、それはたし 舎利信仰の兩樣があること、僧傳の中では『宋高僧傳』に至って初 づけられている」。 迎えた高僧の舎利を崇める高僧舎利信仰へ、さらには、それを信仰 な佛舎利信仰から、自らの覺悟によって佛陀の遷化と同様の臨終を べている。「凡人の至り得ぬ境地に達した佛陀の舎利を崇め、人の 第三章「舎利信仰と僧傳」では、舎利信仰には佛舎利信仰と高僧 への推移には、時代の精神の歩みというものが、はっきりと方向 かくして趣を異にはするものの、 問題は再び第

って多いことに注目するからである。僧の「臨終明驗の效」として舎利その他の異象に關する記事が目立めに」との副題がそえられているのは、蕎洪の『禪林僧寶傳』に禪

れている。「魂無不之、庸詎知兮」。この文章が、第二部第三章で 引かれていた劉禹錫の「子劉子自傳」のつぎの文章が本章にも引か 一一般である。ちなみに、第二部第三章と第三部第一章に 作らざる」ことを一つの文化傳統とした中國の文化の核心を突いた こと「死生觀の變化の流れ」の問題だけにはとどまらず、「述べて 流れを見定めることは、甚だ困難であろう」と指摘しているのは、 であって、「遺言という文章をもって中國における死生觀の變化の 不思議の感を抱かなかった」という 事實に 注目し、それは 恐らく 五百年以上の時閒を隔てて「同じ内容の文章が存在しても、人々が 唐の皇甫湜の文章としてそっくりそのままに收められており、かく ている皇甫謐の「篤終論」が『全唐文』ではまったくの誤りながら けれども、それだけにとどまるものではない。『晉書』に收められ おける遺書そのものについての概觀は丁寧周到、詳細親切を極める 書を通して古代及び中世の中國人の死生觀が考察される。第一章に ――」、第二章「韓愈の遺言をめぐって」から成り、遺言ないし遺 は「死後魂はあらゆる所を浮遊するということだが、死んでしまっ 「書き言葉における文體がほとんど變化しなかったこと」によるの 第四部は、第一章「古代中國の遺言――その形式面よりの

い。 頁)。 いずれの解に從うべきなのか、 いささかの戸惑いを禁じ得な

奕批判は傅奕死後のことであったはずだからである。 だ。著者はさらに宋の宋祁の遺言「治戒」に、韓愈の精神が繼承さ 書くべきものであり、しかも往々にして名人巨公に制作が依頼され 言うのも、 た學僧と對決したり」 有害と無益を様々な形で訴え、その度に法琳・明檗・李仲卿といっ れていることを發見する。宋祁はもとより韓愈の古文の繼承者であ 韓愈との思想上の繋がりの極めて強い弟子であった點に注目するの したわけではなく、皇甫湜の撰文にかかるのだが、著者は皇甫湜が るのが通常一般であったからである。韓愈の場合には自ら墓誌を撰 あった傅奕と同様の「自らの内なる強い意志」を見出している。 もに遺言を殘した白居易、あるいは韓愈の排佛の基づくところでも Ŕ であって、韓愈の「神道碑」のほか「墓誌銘」もまた彼によって撰 葬無不如禮、 の風潮に對する警告」を讀み取るだけではなく、それよりも何より せられている。著者は韓愈のこの遺言に「華美に流れる當時の喪儀 吉凶一無汚我」と傳えられている韓愈の遺言。皇甫湜は韓愈の弟子 「墓誌銘」の制作を依頼した行爲に、自撰墓誌を預め用意するとと つまり誰しもが残すわけのものではなく、また墓誌は第三者が 韓愈が自ら遺言を残し、また自らの弟子に「神道碑」ならびに 儒教の喪葬儀禮のプロセスの中に位置づけられるものではな 小さな誤りと思われるのは、「傅奕は、佛教の國政における 章で取り上げられるのは、皇甫湜撰「韓文公神道碑」に 第一章ですでに確認がすまされているように、 俗習夷狄、 云々とある一文(三三六頁)。 盡符圖、 寫浮圖以七數之、 及拘陰陽、 法琳たちの傅 遺言は本 一喪 ځ

> とはあっても、それ自體が研究對象となることは多くない。原因は 學の狹閒にあって、それらの消長を論じるために取りあげられるこ 今後のさらなる抱負を語る「變わるものと變わらぬもの」と題され こめられた意圖をあらためて確認しておこう。本書の上梓をおえて 代であるどころか、可能性と創造性に富む極めて内容豐かな時代で その枠を擴げ、この印象の薄い時代の内質を描きだそうと試みた」。 なく、葬制とか遺言といった思想を反映する習俗にも目を向けて、 佛教分野の資料を援用し、また直接に思想に言及する作品ばかりで で拙著では、思想史研究家が從來ほとんど手をつけなかった歴史・ いくつか考えられるが、第一は、歴史上の様々な事情により、 印象の薄い時代であると認識されて來た。漢の訓詁學と宋の性命理 た一文(『創文』二〇〇〇年十一月號)である。「唐代は思想史上、 あることを著者は見事に描き出したのである。 を一變することとなったのであり、唐代が中國思想史上の空白の時 かくして、「印象の薄い時代」は本書を得たことによってその様相 な思想史の枠に入れるべき資料が極端に少ないからであろう。そこ 以上をもって書評をおえたいが、著者自らの言葉によって本書に

と、本書が取り上げている文章は川合氏の著書にもしばしばにわたあわせて參照されるべきであろう。「陸文學自傳」はもとよりのこまをも川合康三氏の『中國の自傳文學』(創文社、一九九六年)がまとも川合康三氏の『中國の自傳文學』(創文社、一九九六年)がる著者の強い關心を感じ取るととであろう。この點に關しては、是る著者の強いが、本書を通讀しおえた者は、遺言のほか、自傳、自に過ぎないが、本書を通讀しおえた者は、遺言のほか、自傳、自に過ぎないが、本書を通讀しおえた者は、遺言のほか、自傳、自に過ぎないが、本書を通讀しおっている文章は川合氏の著書にもしばしばにわた

で、参照していただければ幸いである。 に關しても、評者は『中國文學報』五四册に一文を寄せているの代の精神がくっきりと描き出されているからである。川合氏の著書そうであるように、川合氏の著書にもまた自傳に反映されたその時はり中唐時代に向けられていると見受けられるのであって、本書がはり中唐時代に向けられていると見受けられるのであって、本書が って取り上げられている。そして何よりも川合氏の最大の關心もや

れる方がよほど生産的であると考えたからである。本書が從來の中由として、評者のごとき老頭兒よりも新進氣鋭の徒が書評を擔當さり、公正をかくことを恐れたからである。さらにまたより大きな理旨の意向を傳えた。 一つには、 評者は 著者と 三十年來の 知己であ編集子から本書の書評の依賴を受けた時、いったんは辭退したい

は、本書のほんの小さな瑕瑾にしか過ぎないのである。 は、本書のほんの小さな瑕瑾にしか過ぎないのである。 は、本書のほんの小さな瑕瑾にしか過ぎないのである。 は、本書のほんの小さな瑕瑾にしか過ぎないのである。 は、本書のほんの小さな瑕瑾にしか過ぎないのである。 は、本書のほんの小さな瑕瑾にしか過ぎないのである。 は、本書のほんの小さな瑕瑾にしか過ぎないのである。 は、本書のほんの小さな瑕瑾にしか過ぎないのである。

A5判 四一八頁 七五〇〇圓